

## ●特別寄稿

# 北方四島交流教育関係者・青少年訪問事業に参加して ～択捉島の今～

福島県 福島市立清水中学校 校長 渡辺康弘

## 1 はじめに

平成30年度の北方四島交流教育関係者・青少年訪問事業は、択捉島の紗那村を訪問先として9月13日（木）から17日（月）の日程で開催され、私は中高生17名、教員23名を含む62名の訪問団の団長として参加させていただいた。ここでは択捉島に上陸した2日間の行程で見聞きしたことを中心に、「択捉島の今」を紹介する。

## 2 9月14日（金）～択捉島までの行程～

北方四島交流事業には、専用の交流船「えとびりか号」（写真1）が利用される。14日午前9時20分に根室港（図1①）を出港した船は、直接択捉島へ進路はとらず、国後島を経由する必要がある。

旅券（パスポート）・査証（ビザ）なしで行われている交流事業であるが、北方領土をめぐる問題は未解決であるため、北方領土に上陸す



写真1 えとびりか号

るためにはロシアの国境警備隊による入域手続きが課せられている。

書類審査や入域者のチェックなど、手続きのために経由しなければならない国後島の古釜布湾（図1②）でのタイムロスには2時間以上になる。平成29年度から一部航空機を交通手段とする墓参が認められたとのことであるが、回数や人数には限りがある。高齢化の進む元島民の身体的な負担を軽減するためにも、ロシア政府には、まずは出入域手

続きの簡略化が図れるよう努めていただきたいという思いを強くした。

入域手続きを終え国後島の古釜布湾を出港したえとびりか号は、左手に北方四島の最高峰である爺爺岳（標高1772m）（図1③）を望みながら国後水道（図1④）を抜け、進路を北東に向けた。心配

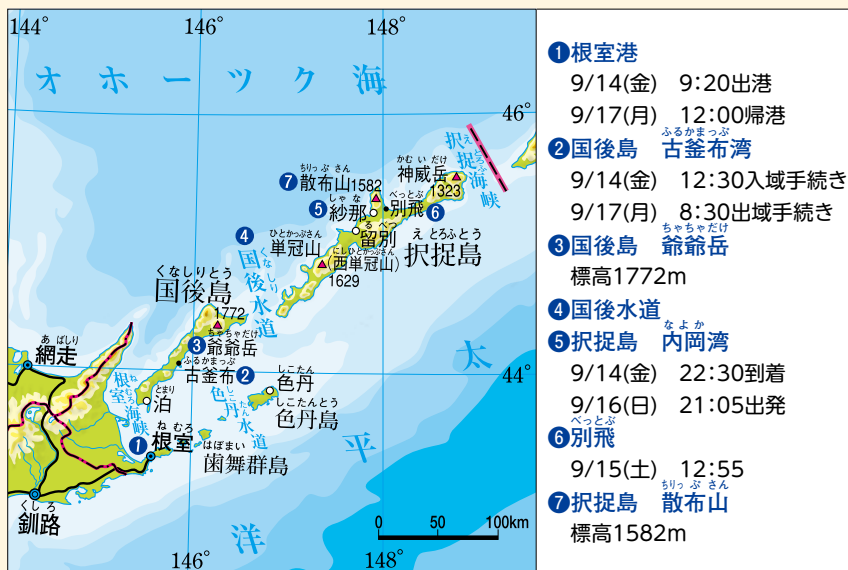


図1 択捉島周辺図と4日間の行程

されていた船の揺れもほとんどなく、夜22時30分、択捉島紗那村の内岡湾（図1⑤）に到着した。

### 3 9月15日（土）～択捉島上陸1日目～

#### （1）博物館視察

えとぴりか号は、大型船のため沖合に停泊し、港から出迎えのはしけに乗り換えての上陸となった。島で団員の移動に使われた乗用車は、未舗装の道路が多い交通事情に対応するため、多くが日本製の中古のRV車であった。

港から約10分の距離にあるスポーツ文化会館に移動し、併設されている博物館を見学した。36年前に開館したという博物館は、こぢんまりとしたスペースに動植物、考古学、民俗学等の展示品が並び、一角には交流事業の際に日本から送られた着物や民芸品も展示されていた。解説してくれたロシア人の学芸員は「択捉島は日本人が90年間支配した後、第二次世界大戦後ソ連の領土になりました。」という表現で説明を終了した。認識の違いを痛感させられた瞬間であった。

#### （2）住民交流イベント

スポーツ文化会館の多目的スペースを利用して、住民交流イベントが開催された。準備した体験活動は「光るどろだんご製作」「スーパーボール製作（写真2）」「和の風景画の塗り絵・お城のなぞり書き」の3種類。62名の団員は3



写真2 スーパーボール製作のようす

つのグループに分かれ、通訳の方の力を借りながら身ぶり手ぶりで手順を説明した。

3グループとも、前日船内で行った事前体験の成果が発揮され、とてもスムーズにそして和気あいあいとした雰囲気の中作業が進み、参加したロシアの子どもたちの、完成した作品を手にする満面の笑顔が印象に残った。また、作業が早めに終了した子どもたちは、誰に言われるまでもなく積極的にコミュニケーションを図っていた。その姿に、子どもたちの柔軟性と適応力を感じることができた。

#### （3）茶話会

中高生たちはロシアの子どもたちとのレクリエーション（腕相撲、ドッジボール、綱引き、リレー競争）を、教育関係者は5グループに分かれ地元住民との茶話会を催した。私のグループは、ロシア側からは保健所所長のスベトラーナさん（55歳女性）とその友人でエンジニアのクリスティーナさん（35歳女性）の2名、日本側からは7名が参加して行われた。参加者一人ひとりが日本の、そして択捉島のイメージを述べた後、それぞれの国の印象や地震を話題として意見交換を行った。その中で、二人のロシアの方が話された「択捉島の魅力」を紹介する。

スベトラーナさん：言葉で表現することは難しいが、島が発する目に見えないエネルギー（自然や空気感など）と人間関係が魅力である。厳しい自然が人との結びつきを強くしてくれている。

クリスティーナさん：飾り気のないところ。具体的には生活に必要なものはそろっているが、それ以外のものはないところがこの島の魅力である。

島を愛するロシア人の姿がそこにあった。

#### （4）別飛<sup>べつと</sup>日本人墓地墓参

紗那の集落から乗用車で20分ほどのところにある別飛日本人墓地を訪れた（図1⑥、次頁写真3）。

海辺近くの丘陵地、牧場の一角に柵で囲まれた一基の墓石がひっそりとたたずみ、「別飛墓



写真3 べつとぶ 別飛日本人墓地

地」という標識がなければ気づくことのできない墓地であった。戦後、墓とは気づかなかったロシア人の手により、道路の建設資材やかまど、小屋の土台として数多くの墓石が失われたそうである。

### (5) 水産加工場見学

別飛の展望台から美しいオホーツクの海と散布山ちりつぷさん (標高1582m) (図1⑦)を眺望した後、オーヨ湾に面して建設された「クリリスキー・リュバク」水産加工場を見学した(写真4)。

2006年に建設された水産加工場では、さけやますを中心に近海でのトロール漁や定置網漁で捕獲した魚を加工(主に魚卵と身に分ける)、冷凍し、それらはロシアはもとより中国や韓国、そして日本で売られている。600人の従業員が二交代制で作業を行っているということで、改めて択捉島近海の豊かな水産資源を実感するこ



写真4 ちりつぷさん 水産加工場と散布山

とができた。

### (6) 紗那商店街視察

集落の高台にある食料品や雑貨、酒類などの専門店が数件点在する商店街を訪れた。根室で両替したルーブル紙幣を使い、みやげ物や飲料水を購入することができた。商品の中には日本製や韓国製の菓子類、インスタントラーメンも販売されていた。価格は日本よりもやや高めであった。酒類は、ウォッカの本場ということもあり、たくさんの種類が壁一面に並べられ販売されていた。

## 4 9月16日(日)～択捉島上陸2日目～

### (1) 紗那日本人墓地墓参

前日の別飛の墓地とは違い、小高い丘の斜面に複数の日本人の墓石とロシア人の墓が合葬された墓地であった。墓を管理する地元の方から、ロシア人が戦後一時荒れ果てていた日本人の墓石を集め整備してくれたという話を伺った。ロシア人の死者に対する畏敬の念を感じ取ることができたエピソードであった。

### (2) 紗那下町散策

紗那の下町散策では、日本語が彫られた句碑くひや寺院の灯籠の土台など、かつて日本人が生活した証をわずかながら目にすることができた。その中で唯一、旧紗那小学校の校舎が残されていた(写真5)。

派手な色のペンキで塗装されたその建物は、



写真5 しやな 旧紗那小学校の校舎

近年まで図書館として利用されていたそうである。校庭であったと思われる場所は、アイスホッケー場として利用されていた。

### (3) ますの孵化工場・採卵場見学

孵化工場の一部は、戦前日本人が建設した施設を利用しているとのことであった。工場の近くにある採卵場のそばには、川をせき止めたいけすにおびただしい数のカラフトマスがうごめいていた。前日見学した水産加工場と同様、またしてもこの島の豊かな水産資源の一端を目にすることとなった。

### (4) 温泉施設視察

環太平洋造山帯に属する択捉島には温泉が豊富に湧き出ている。訪問した温泉施設も戦前から利用されていたものを水産加工場や孵化工場を運営する企業が、10年ほど前に整備した施設であった。かすかに硫黄臭のする茶色がかった温泉に、水着を着用したロシア人家族が楽しそうに入浴していた。

### (5) ホームビジット

午後からはグループに分かれ、ホームビジットを行った。私は、前日の茶話会でご一緒したスベトラーナさんの自宅(4階建ての集合住宅)に招かれ、同じく昨日交流したクリスティーナさんと会計検査員のアジズさん(29歳男性)の3名と親交を深めた。日本人は、通訳を含め6名が参加した。手づくりのお菓子や特産のコケモモ、カラフトマスを使った料理をいただきながら、お互いの子育て支援や住宅事情の話題に会話が弾んだ。

択捉島では、日本の小学2年生から高校3年生までにあたる年齢の11年間の一貫教育で、卒業後は多くがサハリン、またはロシア本土の大学に進学する。とくに成績の優秀な学生に対しては、国からの手厚い援助があ

るとのことであった。3名の話からは、ロシアを、そして択捉島を深く愛する気持ちを感じ取ることができた。

夕刻、はしけに乗り込み、択捉島を去る時間が来た。港にはスベトラーナさん、クリスティーナさん、アジズさんの姿があった。お互いに見えなくなるまで手を振り別れを惜しんだ。

## 5 おわりに

帰港後の記者会見では、「択捉島でかつて日本人が生活していたという証を目にしたいという思いがあったが、十分に果たすことは叶わなかった。数多くのロシア人が家を建てて住んでいる現実や、択捉島を終の棲家と考えるロシア人を目の当たりにして、北方領土問題が安易に解決できないことを実感した。」と率直な感想を述べさせていただいた。

今後、授業において北方領土問題を扱う際には、領土問題の経緯や日本の立場を理解させるとともに、故郷を追われ望郷の思いを抱き続ける元島民の思いと現在北方四島を故郷として生活しているロシア人のようすや思いを交錯させながら、児童・生徒にこの問題について考えさせ、領土問題に関する意識を一層高めていただければと考える。



写真6 訪問団と択捉島民